

プラトンの運動競技論序説

— スポーツ概念のギリシア的把握に向けて —

木庭 康樹 (広島大学大学院総合科学研究科)

An Introduction to Plato's Theory of Athletics

— For an Understanding of the Concept of Sport in Ancient Greece —

Kohki KINIWA (Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University)

Abstract

This paper aims to consider Plato's theory of athletics from the three viewpoints of *techne*, *soma*, and *pathos*, focusing on his descriptions of athletics. It seems that these three viewpoints give a broad perspective for us to consider, athletics not only in ancient Greece, but also sport in modern society. This is because the three Greek words, *techne*, *soma*, and *pathos*, have such large meanings which are different from modern words like technique, body and emotion, and the three viewpoints would enable us to relativize the modern view of sport and to understand the concept of sport in a larger context.

In Plato, athletics is not what caused by only the human body (*soma*), but the very intellectual practice in a connection with mathematics and expertise (*techne*) of measurement. Athletics means the contest with an opponent's body, making use of one's excellence of body (strength, speed, size, etc), and it provides pleasure for the people who watch it. Moreover, it is possible to find the love for victory, mettle, craftiness and wildness which are beyond moral precepts as the peculiar affections (*pathos*) and dispositions in athletics.

However, Plato does not always evaluate athletics positively, since athletics make the human body and soul unbalanced towards ones which can adapt themselves only to a specific environment, like the animal body (*soma*) and soul. According to Plato, athletics should be regarded as dangerous for the city state and education, since it has the same immoral characters as the other traditional cultures (e.g. poem, play and the other arts).

Though sport is often discussed from the viewpoints of morality and education in the present age, it is peculiar that the essence of athletics is drawn from various angles in Plato. Plato's theory of athletics would enable us to understand the pluralistic values of sport without being tied to the viewpoints of morality and education, and to reply to the problems of sport, such as sport sciences, doping, fair play, etc from various angles.

はじめに

後3世紀の著述家ディオゲネス・ラエルティオスによると、プラトン(前427-347)は、アルゴスのレスリング選手アリストンのところで運動競技を学び、イストモスの祭礼競技においてレスリ

ングの試合に出場したと言われている。また、ギリシア語で「幅の広い」という意味を持つ「プラトン」という名も、もともとはかれの「広い胸幅」にちなんで名づけられたとされる。そして、現代においても、かれの競技者としての名は、米国ロードアイランド州立大学内の国際スポーツ学院に設

立された「世界有識者スポーツ人の殿堂」入りを認められるほどであり、実際にプラトンの著作の中にも、運動競技に関する記述を数多く見出すことができるのである。

本稿は、そうしたプラトンの運動競技に関する記述に着目しつつ、かれの運動競技論を、「テクネー」、「ソーマ」、「パトス」といった三つの視点から考察することを目的としている。というのも、これら三つの視点は、古代ギリシアの運動競技のみならず、現代のスポーツを考察する上でも、有効なパースペクティヴを与えてくれるように思われるからである¹⁾。つまり、これら三つの古代ギリシア語はそれぞれ、「技術」や「身体」、「感情」といった現代語には収まりきらない豊富な意味内容を持っており、それらの視点からプラトンの運動競技論を検討することは、現代のわれわれのスポーツ観を相対化し、スポーツの概念をより広いコンテキストにおいて把握することを可能にすると考えられる。

ただし、プラトンにおいて、運動競技は必ずしも肯定的な評価を与えられておらず、運動競技の専門家にあつては、むしろ否定的な文脈で取り扱われることの方が多い。これは、プラトンが、運動競技のみならず、詩や芸術、演劇などのあり方を、道徳的もしくは教育的な関心から論じているためである。

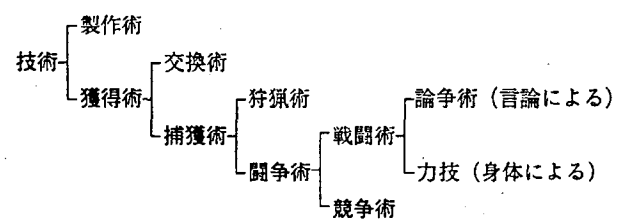
しかしながら、逆に言えば、そうした否定的な文脈の中にも、運動競技に独自の性格が描き出されている可能性は十分に考えられるのであり、また、それらの文脈によって、現代のわれわれが、運動競技やスポーツを道徳的もしくは教育的な関心からは外れたところで論じることも可能となってくるように思われる。すなわち、本稿は、スポーツ概念のギリシア的な把握に有効な視点をプラトンにおいて確認し、プラトンの運動競技論をめぐる理論の展開に新たな展望を開くための序説の試みである。なお、考察の手順としては、上で示したように、1.「運動競技とテクネー」、2.「運動競技とソーマ」、3.「運動競技とパトス」という順に検討をすすめ、最後に、これら三つの考察結果を

踏まえて、プラトンの運動競技論の全般的な特徴を描き出してみることにする²⁾。

1. 運動競技とテクネー

まず、プラトンにおいて、「テクネー」は、人間の職人的な技術のみならず、自然の働きである神の技術から、個人の生き方や行為の価値規範に関わる道徳的知識、詩や芸術などの模倣術にいたるまで、非常に広範な領域を指し示すものとなっているが、こと人間の「テクネー」に限って言えば、それは、対象性、合理性、生産性といった三つの基本的性格によって捉えられる。つまり、人間の「テクネー」とは、他の技術と明確に異なる対象を持ち（対象性）、必然的・規則的・説明可能なプロセスでもって（合理性）、対象そのものとは区別されうる所産を作り出す（生産性）ものなのである³⁾。

他方、「アゴーン」と呼ばれる競技に関して、プラトンは、競技的な運動（アゴーニアー）が、技術的な事柄（テクニケー）であることを示唆した上で⁴⁾、次の図のような『ソピステス』の技術の分割において「運動競技術（アゴーニスティークー）」の基本的性格を間接的に描き出している。



図：『ソピステス』の技術の分割⁵⁾

すなわち、『ソピステス』によると、まず、運動競技術と同じく「アゴーニスティークー」と呼ばれる「闘争術」は、「それまでは存在しなかったものが後に生じてくることの原因となるような、すべての力（デュナミス）」⁶⁾であるところの「製作術（ポイエーティークー・テクネー）」ではなく、むしろ、その「製作術」から区別された「獲得術（クテーティークー・テクネー）」の中に含まれる。

そして、その「獲得術」とは、「ものを作り出すのではなく、すでに存在していたり生じてしまったりしているものを、言葉（ロゴス）や実際の行動（プラクシス）により手に入れたり、あるいは他面、他人が手に入れるのを許すまいとするもの」⁷⁾なのである。

また、この技術の二分法によって、「製作術」が、対象領域における非存在を存在へと導いてものを作り出す技術であり、他方「獲得術」が、既存のものを手に入れる技術であることが明らかにされるが⁸⁾、とりわけ、この技術の二分法は、運動競技技術の生産性を把握する上でも重要な区別となるように思われる。というのも、この区別に従えば、「製作術」としてのギムナスティケー（体育術）の所産が、それによって後から作り出されたものであるのに対し、他方「獲得術」としての運動競技技術の所産は、運動競技技術に先立って存在し、またそれによって後から獲得されたものであるということがわかるからである。現代においても「名選手、名監督にあらず」という諺が存在するように、「運動競技技術」の生産性は、ギムナスティケーのような「新たなものの製作」とは違い、あくまでも「既存のものの獲得」といったところに求められるべきなのである。

さらに、上の内容のずいぶん後になって、再度試みられる技術の分割では、「獲得術」のうち「狩猟術」から分けられた「闘争術」が、「競争術」と「戦闘術（マケーティケー）」に分割され、また、後者の「戦闘術」のうち、「身体によって身体を相手に行なわれるもの」が、「力づくによるもの（力技）」と呼ばれている⁹⁾。だが、この「身体（ソーマ）によって身体（ソーマ）を相手に行なわれる力づくによるもの」は、あくまでも「戦闘術」に対して言われたものであるから、一見すると、運動競技技術には直接関わりがないように見えるかもしれない。

ただし、上の「戦闘術」に対して言われた「身体によって身体を相手に」という部分は、その後で「論争術」について述べられる「言論によって言論を相手に」という部分と非常に対照的であ

り¹⁰⁾、しかも、両者の区別は、運動競技技術とそれ以外の「競争術」に関して、それぞれの対象や手段の違いを類推する上でも重要な区別となるように思われる。なぜなら、様々な競争のなかでも、運動競技が、上の「戦闘術」に含まれる「力づくによるもの（力技）」と同じく、「身体によって身体を相手に」行われるとするならば、それは、言論によって行われる「論争術」や馬を扱う馬術のみならず¹¹⁾、「馬や犬や自分自身の身体を使って四足獣を追う狩猟」¹²⁾などとも明確に区別されるからである。

つまり、運動競技技術が、弓や槍、グローブなどの道具を手段にするとしても、「身体によって身体を相手に」行われるという部分は、言わば、運動競技技術にとっての必要条件であり、運動競技技術の手段や対象を表しているのである。もちろん、馬術や狩猟術は、「身体や道具によって」行われることもあるが、それらにとっては、むしろ「動物によって」もしくは「動物を相手に」ということの方が、必要条件なのである。

このように、『ソピステス』の技術の分割からは、運動競技技術の対象が、運動競技の対戦相手の身体にあり、また、その対戦相手の身体に対して運動競技者の用いる手段が、運動競技者の身体にあるということが読みとれるのである。そして、運動競技技術がその所産として獲得するのは、おそらく対戦相手の身体を凌ぐこと、すなわち、運動競技における勝利ということになるのであろうが、そうした勝利を獲得するプロセスについては、最後にテクネーの合理性という観点から検討を加えておく必要があるだろう。

たとえば、プラトンは、『ポリテイコス』において、人間の職人的な技術が、「適度（メトリオン）」や「時宜（カイロス）」、「相応（プレポン）」、「適正（デオン）」などを目標に置きながら仕事をする測定術の一種であると見なし、あらゆる技術や学問を数学的な観点から体系化している¹³⁾。つまり、プラトンによれば、これら「適度」や「時宜」、「相応」、「適正」などの両極端を避けた「中庸（メソン）」をその座としている様々な標準類

の全部をそれぞれ目標に置きながら測定するディアレクティケー（哲学的問答法）を、典型的基準とし、いろいろな事物の数や長さや深さや幅や速度などを、それぞれその反対のものと比較しながら測定する技術こそが、数学であり、また、これとつながりを持つのが、職人的な技術なのである。

『ポリテイコス』において、プラトンは、はたらき（プラクシス）のうちの数多くのものに着目した上で、われわれが、しばしば思考とか身体とかの、さらに、音声とかの、「速さ」や「激しさ」や「鋭さ」を、「勇ましき（アンドレイアー）」という一つの称呼でもって称賛し¹⁴⁾、また逆に、思考のはたらきの、また、実際の行動（プラクシス）の、「悠然さ」や「柔軟さ」に対して、さらに、音声に生じている「滑らかさ」や「悠然さ」に対して、あるいは、「リュトモス（律動）に合致した運動（リュトミケー・キーネーシス）」や、「適宜に（エン・カイロー）」「悠然さ」を活用しているムッサ（文芸の神）に対して、これらすべてに「慎ましき（コスミオテース）」という名前を用いて賛嘆していると述べている¹⁵⁾。つまり、ここでプラトンが言わんとしているのは、身体のはたらき（プラクシス）に関わる「速さ」や「激しさ」や「鋭さ（もしくは俊敏さ）」も、あるいは、その「悠然さ」や「柔軟さ」も、それらが「時宜」を得ていなければ、過激で狂暴なものになってしまうということである¹⁶⁾。そして、上のような身体の「速さ」や「激しさ」や「鋭さ（あるいは俊敏さ）」という部分からは、運動競技術を、他方、「リュトモスに合致した運動」という部分からは、踊りの技術を、それぞれ想像することができるのである。

したがって、プラトンの場合、運動競技術は、対戦相手の身体を対象とし、運動競技者の身体によって運動競技における勝利を獲得する技術であると言えるのであり、しかも、その勝利を獲得するプロセスには、「適度」や「時宜」、「相応」、「適正」などを目標に置きながら、運動競技者の身体のはたらきを測定する（あるいは調整する）作用を見出すことができるのである。なお、こ

した運動競技術に伴う「ローマー（力量や技巧）」や「意図的な過ち」などについては、それぞれこの後の2.「運動競技とソーマ」や3.「運動競技とパトス」の考察において、見てみることにしたいと思う。

2. 運動競技とソーマ

さて、プラトンの場合、「ソーマ」という語は、ほとんどすべての著作において言及され、人間の身体のみならず、宇宙や天体、動物といった生物のからだ、生命の失われた死体、さらにはそれらを構成する単純物体（元素）までをも含む、非常に大きな外延を持っている。運動競技が人間の身体（ソーマ）を抜きにして語るができない以上、両者の関わりについて考察する際にも、そうしたソーマの広大な外延を視野に入れつつ、人間の身体と他のソーマとの異同を見定めておく必要があるように思われる。

すなわち、本章では、はじめに、運動競技術に使用される身体の独自性を、他の職人的な技術に使用されるそれとの比較によって明らかにし、さらに、運動競技者の身体のあり方を、同じく「ソーマ」と呼ばれる動物体のあり方との比較において把握してみることにする。ただし、本稿の冒頭にも述べたように、プラトンの運動競技に関する記述は、おおむね否定的な文脈にあるが、そうした否定的な文脈の中にも、運動競技に独自の性格が描き出されている可能性は十分に考えられるのである。

では、まず、運動競技術に使用される身体について見てみると、プラトンは、『ヒippias（小）』において、競走やレスリングなどのすべての身体の使用（ソーマトス・クレイアー）に関しては、弓術のように、弓という行為を自在になす者が、すぐれた「プシューケー（たましい）」¹⁷⁾—すなわち、テクネーを伴ったプシューケー—を所有していなければならないということに加え¹⁸⁾、さらに、そのような行為を自在になす者が、身体の面でもすぐれていなければならないということを示唆し

ている¹⁹⁾。たとえば、すぐれた走者ならば、意図的に速く走ったり遅く走ったりできるし、すぐれたレスラーならば、意図的に強くなったり弱くなったり（倒したり倒れたり）することができる。つまり、この「意図的な過ち」の問題については、プシューケーの領域に関わるので、次章で詳しく取り扱うが、他方のソーマの領域、すなわち、運動競技術に使用される身体には、明らかに強さや速さといった身体の卓越性（アレテー）が必要とされているのである。

ただし、プラトンの場合、そのような身体の使用は、必ずしも運動競技術に限定されず、肉体労働（ポノス）や、その他の職人的な技術（デーミウウルギケー・テクネー）、さらには、戦闘術（ポレミケー）に関しても言われている。では、運動競技術に使用される身体は、これらに使用される身体とそれぞれどのように異なっているのだろうか。

まず、最初の肉体労働や職人的な技術に使用される身体から見てみると、プラトンは、『国家』において、「知能的な事柄にかけては共同者としての値打があまりないけれども、肉体労働のためには充分なだけの身体の強さ（イスキュス）をもっているような人々……こういう人々は、強さの使用を売って、その値段（ティーメー）を賃銭（ミストス）と呼んでいるので……賃銭取り（ミストトイ）と呼ばれている」²⁰⁾とし、他方、「自分の本職である小手先の技術に関して最も精妙な者たちは（コムプソタトイ）……身体が職人的な技術によっていためつけられている」²¹⁾と述べている。

つまり、前者の肉体労働における強さの使用は、それ自体が「値段すなわち価格（ティーメー）」を生み出し、「賃銭すなわち報酬（ミストス）」を目的としている行為であることがわかる。もちろん、当時の戦士や運動競技者などが、報酬をもらう職業として成立していたことはたしかであるが、かれらがもたらす利益は、己の金銭的な利益ではなく、あくまでも国家の保全や運動競技の勝利などといった別の利益であり、かれらは、厳密な意味で、肉体労働者のような「賃銭取りすなわち雇

われ人（ミストトイ）」ではない。肉体労働における強さの使用は、それ自体が報酬を目的としているというところに、その独自性が存在するのである²²⁾。

また、その一方で、後者の職人的な技術の場合には、強さのような身体の卓越性は見られないものの、これに代わって、小手先の技術に関する「精妙さ（コムプソン）」という語を見ることができる²³⁾。おそらく、この「精妙さ」は、そのすぐ後の「身体が職人的な技術によっていためつけられている」ことと何らかのつながりがあるのかもしれないので、この職人的な技術について、もう少し具体的な記述を『国家』以外にも探してみると、『ピレボス』には、以下のような興味深い指摘がなされている。

たとえば、『ピレボス』では、医術やムウシケー（音楽・文芸）などが、「職人的なもの（デーミウウルギコン）」もしくは「手仕事のなもの（ケイロテクニコン）」に分類され、錬磨（トリベー）や経験（エムベイリアー）、感覚（アイステーシス）はもちろんのこと、「推量すること（エイカゼイン：似せるの意）」や「見当づけること（ストカゼスタイ：槍や弓矢で狙うの意）」などに多く頼っているとされている²⁴⁾。また、上の『ピレボス』の箇所によると、多くの人々（大衆）は、見当づける能力（デュナミス）を、訓練（メレテー）と労苦（ポノス）によって「ローメー（力量や技巧）」を作り上げるものとして、テクネー（技術）と名づけているとされる²⁵⁾。

つまり、職人的な技術や手仕事と呼ばれるものには、勘やコツといった曖昧さの余地が認められるのであり、こうした手や指先に身についた「精妙さ」こそが、ローメーの本来意味するところなのである。実際に『国家』第三巻でも、運動競技者の専門家が、このローメーをもっぱら目的として厳しい訓練に励んでいることが指摘されており²⁶⁾、この力量や技巧としてのローメーは、精妙な職人の身体のみならず、運動競技者の身体にも身につけていると考えられるのである。

だが、プラトンにおいて、その運動競技者の身

体は、具体的にどのようなあり方をしていると考えられているのだろうか。おそらく、運動競技者の身体にも、職工の手に見られる肉刺や胼胝のような独特の身体的特徴が存在しているはずである。

たとえば、プラトンは、レスリングの盛んであったスパルタを最真にしていた連中が、レスリングによって耳をつぶしていたこと²⁷⁾、さらには、パンクラティオン²⁸⁾やボクシングやレスリングのみならず、弓や槍、戦車等を使う運動競技などが、しばしば人間の右手だけを強くしていることを明らかにしている²⁹⁾。もちろん、こうしたつぶれた耳や片手利きは、プラトンにおいて否定的に扱われているのであるが、それらは、厳しい訓練によって鍛え抜かれた運動競技者の身体を想像する上では見逃すことのできない特徴であると言える。

また、次に、運動競技術に使用される身体と戦闘術に使用される身体との比較を見てみると、プラトンは、『法律』において、レスリングの技術のなかに戦闘術と相関性のあるものが存在することを認め、国防のためには、そのようなものだけが学ばれるべきであるとしている³⁰⁾。しかしながら、かれは、一般のレスリングやボクシングの運動競技術が、戦場では役に立たないと考えており³¹⁾、とりわけ『国家』においては、ルールのない生死をかけた戦闘において、戦士は、知識や経験の上で、ボクサーをはるかに凌ぐことを明らかにしている³²⁾。なぜなら、戦闘術は、運動競技術と同じく闘争術に属するが、実用や生存を目的としているといった点で、運動競技術とは明らかに異なるからである。

しかも、プラトンは、理想国家における戦士の身体の状態（ヘクシス）に対して、運動競技者（アスケテース）の身体の状態が、「あんなのは半眼りの状態といってもよいようなもので、健康に関して不安定な状態なのだ……彼ら運動競技者たちは生涯を眠って過し、また、定められた生活習慣（ディアイタ）を少しでもふみはずすと、ひどい大病になる」³³⁾と述べている。すなわち、この箇所からは、運動競技者の身体が、多くの睡眠を必要とし、ある一定の生活習慣の下でしか健康

を維持できないことがわかるだろう³⁴⁾。

そして、運動競技者の身体の状態に関して言うならば、『ティマイオス』や『法律』第五巻の中でそれぞれ、脚が長過ぎるとか、他のどこかが大き過ぎるとかして、それ自身で均衡のとれていないような身体³⁵⁾や、美しさや強さ、速さ、大きさ、健康といったすべての性質を適度にそなえていない身体が、プラトンによって批判されている³⁶⁾。もしも、このような批判が、運動競技者の身体に向けられたものであるとすれば、運動競技者の身体の状態は、特定の部位が大きすぎたり、全体の大きさが大きすぎたりして³⁷⁾、美しさを欠いているということになる。また、強さや速さなどといった運動競技者の身体的能力にしても、個々の運動競技種目に必要な卓越性だけが過度に高められているから、上の運動競技者の身体の状態と合わせて考えると、競走の選手なら、「足が長くて速い」、レスリングの選手なら、「身体が大きくて強い」ということになるだろう。

このように、『国家』や『ティマイオス』や『法律』においては、戦士の身体と運動競技者の身体がしばしば比較され、両者の間に似通ったところも認められているのだけれども、運動競技者の身体は、戦士のそれに比べ、ある特定の形態や能力に偏っていることがわかる。そして、このことは、運動競技者の身体が、ある特定の競技種目に必要な卓越性だけを過度に高められ、以下のような動物体と同じく、ある特定の環境にしか適応できないものになっていることを意味しているのである。

つまり、『ティマイオス』の輪廻転生の物語によれば、前世において悪しき生活を送った人間のプシューケーは、それぞれのあり方に従い、各々が割り当てられた固有の場所にふさわしいからだをまとめて、動物へと生まれ変わる。たとえば、プシューケーが軽率であれば、そのからだも軽く、毛髪の代わりに羽毛を生やして、飛翔する（鳥類）。また、プシューケーが、天をかえりみず、大地ばかり見ているならば、からだも、大地に引きつけられ、四つん這いの姿勢をとったり（獣類）、足

を失って大地を這うようになっていたりする（蛇?）。さらに、プシューケーが不純であれば、からだの一部である呼吸器も変化して、水中の不純な空気を吸うようになってしまう（魚類³⁹）。このように、動物体は、多種多様な形態を持ち、個々の生息地においてそれぞれが特化しているため、特殊性や偏向性をそなえているのである。

他方、運動競技者の身体もまた、自らに身につけられた技量や熟練によって、個人的に、あるいは、せいぜい専門的に求められる身体的特徴をそなえているにすぎず、そのような特徴は、先のような長すぎる手足やつぶれた耳、片手利きなどに見ることができる。また、運動競技者の身体が、より高度に洗練されればされるほど、逆に、それは、万人に共通して求められる身体的特徴を失い、運動競技という特殊な環境にしか適応できないものになってしまう³⁹。この意味で、運動競技者の身体は、競技種目の別だけでなく、技量や熟練の度合いによっても、それぞれ異なった特徴を示すと言える。しかも、技量や熟練が身についた運動競技者の身体には、動物体の特殊性や偏向性に最も近い性格を見出すことができるだろう。

ただし、運動競技者の身体は、動物体のように自らの自然的素質や周囲の自然環境のみによって生成するものではなく⁴⁰、それらの自然的要因に加え、ギムナスティケーやポノス（労苦）、生活習慣（ディアイタ）などの人為的要因によって始めて生成するものである⁴¹。また、運動競技者は、技量や熟練だけに頼るのではなく、他の様々なテクネーによって、自らの身体の長所や短所をそれぞれ、向上させたり、克服したりすることもできる。したがって、これまで見てきたように、運動競技に関するプラトンの記述は、必ずしも肯定的なものではないが、逆に、それらの記述からは、運動競技者の身体が高度な専門性をそなえていることがわかるのである。

3. 運動競技とパトス

さて、最後に、運動競技とパトスとの関わりを

見ていくことにするが、プラトンにおいては、パトスもまた、テクネーやソーマと同様に、感情や情態変化、感覚的性質、受動状態などの広い意義をになうものとなっている。たとえば、人間に限って言えば、パトスには、大きく分けて、熱冷乾湿などのように身体の領域に見られるものと、喜怒哀楽などのようにプシューケーの領域に見られるものがあり、とりわけ、後者は、今日われわれが感情と呼ぶものに近いと言える。ただし、この感情としてのパトスも、身体の領域に生成する感覚的性質と同じく、身体とともにあり、身体なしには生じないと考えられているから⁴²、運動競技におけるパトスを考察する際にも、そうした身体とプシューケーとの関わりを念頭において考察をすすめていく必要があるだろう。

また、これと同時に、運動競技におけるパトスをめぐっては、運動競技者自身のプシューケーのみならず、その運動競技者の身体を外から感覚し、かつ、それによって何らかの感情を抱く、他者のプシューケーも、あわせて問題にすべきであるように思われる。すなわち、以下の考察では、運動競技者の身体に、①「運動競技者自身のプシューケー」と②「他者のプシューケー」の双方からアプローチすることで、運動競技におけるパトスを、これまでのテクネーやソーマの考察と照らし合わせながら、明らかにしてみることしよう。

では、まず、①の運動競技者のプシューケーと身体についてであるが、プラトンは、『国家』や『法律』において、運動競技者がひたすら勝利と名誉を愛し求める生活を送っていると見なして⁴³、運動愛好家や狩猟愛好家のプシューケーを、怒りや激情の座であるプシューケーの気概的部分に関連づけている⁴⁴。というのも、一流の運動競技者のプシューケーは、もっぱら勝利のためとは言え、健康や贅沢や性愛などといった多くの人びとが幸福なことだとするものを取って斥け、様々な快樂の誘惑に打ち克つことのできるパトスを十分にそなえていると考えられるからである。しかも、当時の運動競技は、レスリングやボクシング、パンクラティオンなどに代表されるような、極度の苦

痛（ポノス）を伴うものがほとんどであり、これらの運動競技に卓越した者となるには、上のような快樂だけでなく、そうした極度の苦痛にも耐えることができなければならないのであった⁴⁵⁾。

とくに、『法律』第一巻においては、当時スパルタでは、勇気の訓練として、狩猟や野営や盗みの訓練などのほかに、ギムナシア（体育的な運動）やボクシングの訓練が重要視され、それらが、恐怖や苦痛に耐えることのできる気概（テューモス）を育むと見なされていたことが紹介されている⁴⁶⁾。また、『国家』第三巻においては、ギムナスティケーによって大いに鍛練を積み、御馳走も大いに食べる場合、はじめのうちは、身体が好調なので自負（プロネーマ）と気概に満ち、もとの自分よりも勇敢になると言われている⁴⁷⁾。つまり、これらの記述からは、こうした気概や自負などが、運動競技の訓練における身体のパトス（恐怖や苦痛）の克服やその訓練によって培われた身体のパトス（好調さ）の影響によって生じたものであり、それらの身体のパトスが、運動競技者の性格形成に深く関わっていることがわかるのである。

そして、『法律』第五巻においては、適度から外れた極端な身体、すなわち、過度の強さや速さを持つ身体が、プラトンによって批判され、さらに、そうした過度の身体が、プシューケーを思いあがった向こうみずなもの（カウノス・カイ・トラッシュス）にしてしまうと述べられている⁴⁸⁾。なお、この記述が、運動競技者に向けられたものであることは、先にも指摘したとおりであるが、この記述からは、先に見た動物体と動物のプシューケーとの関係と同じく、ある特定の能力に偏った身体には、ある特定のパトスに偏ったプシューケーがそなわるということが読みとれるのである。

さて、運動競技者のプシューケーについて、テクネーの観点からもう少し補足を加えておくと、先に見た『ソピステス』では、獲得術が、「ものを作り出すのではなく、すでに存在していたり生じてしまったりしているものを、言葉（ロゴス）や実際の行動（プラークシス）により手に入れた

り、あるいは他面、他人が手に入れるのを許すまいとするもの⁴⁹⁾とされていたが、最後の「他人が手に入れるのを許すまいとする」という部分は、「運動競技術の双方向性」や「運動競技者の真なる嘘」を考える上で重要である。

たとえば、『国家』第一巻では、「正義とは、友には善いことをなし、敵には悪いことをなすことである」というシモニデスの説の検討のために、医術に関して、「人を病気から守ることに有能な者（ダイノス）は、ひそかに病気にかからせることにかけても、最も有能（ダイノタトス）でなくてはならない⁵⁰⁾」といった反論がなされているが、その直前には、運動競技術に関して、「ボクシングにせよ、その他の（闘争の）技術にせよ、闘うにあたって相手を打つことに最も有能な者は（ダイノタトス）、守ることにかけても最も有能である⁵¹⁾」ことが述べられている。そして、その結果、あるものの有能な守り手は、そのものの有能な盗み手でもあるから、正義の人は、お金を守ることに有能であるとすれば、お金を盗むことにも有能だということになり、正義の人の正体は、一種の盗人であることが判明してしまう⁵²⁾。

だが、この反駁の真意は別としても、上の箇所ですべられた闘争術の事例は、医術の事例とともに「技術の双方向性」を示唆するものであり、上の「守ることにかけても最も有能である」という部分は、まさに、先の『ソピステス』の「他人が手に入れるのを許すまいとする⁵³⁾」という部分とも重なってくる。つまり「獲得術」としての運動競技術には、実際の行動によって勝利を獲得することだけでなく、逆に、対戦相手が実際の行動によって勝利を獲得しようとするのを防ぎ、妨害するということも含まれる。医術や闘争術といった他の専門技術知と同じく、運動競技術の場合も、対戦相手に勝利を獲得させまいとする逆のはたらし、すなわち「技術の双方向性」が、運動競技術の技術たりうる条件となっているのである。

また、この「運動競技術の双方向性」を「技術家の真なる嘘」という点から見ると、運動競技者が対戦相手に対してなす「意図的な過ち」は、運

運動競技が技術足りうる条件となるだけでなく、運動競技の駆け引きとしても機能すると考えられるのではないだろうか。つまり、『国家』第二巻によると、プシューケーにおける虚偽は、神々や人間から憎まれるべきものであるが、言葉における虚偽は、敵に対して、また物語の虚構や薬として役立つ。しかも、そのような虚偽は、言葉（ロゴス）や創作（ポイエーシス）だけでなく、実際の行動（エルゴン）においても成立するのである⁵⁴。そして、すぐ後の『国家』第三巻では、素人以外の専門家であれば、こうした言葉や実際の行動における虚偽を、各々が目指す対象の利益のために用いることができると言われている⁵⁵。たとえば、医術の場合、この「技術家の真なる嘘」は、医者が、効き目のある栄養物は口あたりのよい食べものや飲みものに入れてあてがい、害のあるものは口あたりのわるいものに入れ、患者に快苦の正しい習慣を身につけさせるといった形で、実際の治療にも活用されているのである⁵⁶。

他方、『ヒッピアス（小）』において、ソクラテスは「故意に過ちを犯したり、恥ずべき不正なことをなしたりする者は、善い人間をおいて他にはない」という逆説的なアポリアーを導き出すために⁵⁷、「人体に対して故意に悪を行なうプシューケーは、より医術に通じている」⁵⁸という事例を挙げている。とくに、ここで興味深いのは、競走において故意に遅く走ることのできる者がより優れた走者であることや、レスリングにおいて故意に倒れることのできる者がより優れたレスラーであることなど、運動競技者の技術的行為にも言及が及んでいることである⁵⁹。つまり、訴訟に勝利するための弁論術が、様々な虚偽や工夫（メカネー）を用いるように⁶⁰、運動競技技術に通じている者もまた、故意に遅く走ったり、故意に倒れたりすることで、対戦相手が勝利を獲得するのを妨害していると思えることができるのである。

そして、このような運動競技者の「意図的な過ち」は、医者の場合と同様に、あまり道徳的な正当性を問われることはない。たとえば、『ゴルギアス』では、ボクシングを心得た者が、誰かを殴

ることがあるとしても、これを教えたパイドトリベース（運動競技専門の教師）を、憎んだり、国家から追放したりしてはならないと言われている⁶¹。さらに、『ゴルギアス』によると、パイドトリベースによって速く走れるようにしてもらった者は、身体の高めてもらっただけで、プシューケーの不正を取り除いてもらったわけではないから、パイドトリベースに謝礼を払わないこともありうる⁶²とされる。

つまり、『カルミデス』において、医術が、健康という善を目指しながらも、それが結果としてもたらす利益や損失—たとえば、健康になった人が正や不正をはたらくこと—にまで関わることはできないと見なされるように⁶³、運動競技者やその教師もまた、そのような行為の価値規範に関わる道徳的知識ではなく、ただ、殴ったり速く走ったりして相手に勝利するための運動競技技術やそれを授けるための技術に通じているにすぎない。むしろ、プラトンに言わせると、厳密な意味で、行為の道徳的な正当性を問われるべきなのは、自らプシューケーの徳を授けることができると称しているソピストや弁論家の方なのである。

このように、運動競技技術にもとづく行為は、通常の道徳的善悪を超えたところで展開されており、そのような行為における虚偽や駆け引きが、運動競技者のプシューケーにも少なからず影響を及ぼしていることがわかる。すなわち、運動競技技術は、道徳的知識と違って、行為の道徳的な正当性を持ちえないが故に、日常の道徳的規範には収まりきらない自由を、運動競技者のプシューケーにもたらしている。また、先の『国家』第一巻の、「ボクシングにせよ、その他の（闘争の）技術にせよ、闘うにあたって相手を打つことに最も有能な者は（ダイノタトス）、守ることにかけても最も有能である」⁶⁴という表現にもあったように、運動競技者のプシューケーは、相手と戦うことにかけて「ダイノス」、すなわち、有能で、巧みで、狡賢くなくてはならないと言えよう。

では、最後に、②の運動競技者の身体と他者のプシューケーについて見てみると、まず、『ゴル

ギアス』では、不正をなすという醜いことが同時に悪いことだと考えないポロスに対し、ソクラテスが、以下のような美の判断基準を新たに提出していることがわかる。つまり、ソクラテスによると、どんなものでも、それが美しいと呼ばれるのは、何らかの快樂のためか、有益さのためか、もしくは、それら両方のためなのであり、身体の美しさもまた、「身体が何かに対して役に立つとすれば、そのものとの関連で美しい」という有用性と、「身体が眺められるときに、眺める人々を喜ばせるなら、その点で美しい」という快樂性の、二つの基準によって判定されるのである⁶⁵⁾。

たとえば、最初の有用性に関して言うと、『ヒッピアス (小)』の「意図的な過ち」の説明では、身体面ですぐれている者が、レスリングや競走などの身体の使用(ソーマトス・クレイア)において「美しい事柄(立派な事柄)」を為すと言われている⁶⁶⁾。また、『ヒッピアス (大)』でも、ソクラテスによって、美が「有能にして有用なもの」であるという一つの定義が提出されて、眼などの有能な器官を持つ身体全体や、競走に関する事、レスリングに関する事などが、その事例として挙げられている⁶⁷⁾。つまり、プラトンは、身体の有能さや有用さを「美しいもの」と呼び、それらが運動競技においても成立することを明らかにしているものであり、こうした有用性の美が、運動競技を眺める他者のプシューケーにも何らかの影響を与えるということは十分に考えられよう。

というのも、先の『ゴルギアス』によると、美しいものなかには、有用性と快樂性の両方をお互いに兼ねた美も存在すると言われており⁶⁸⁾、他者のプシューケーが、上のような運動競技者の身体の有能さや有用さを見て、それらの美を享受し、また、それらに快樂を感ずることもありうるからである。すなわち、身体の使用にもとづく有用性の美は、運動競技者自身のプシューケーはもちろんのこと、運動競技を眺める他者のプシューケーに対しても、それに固有な快樂を提供するものと見なすことができるだろう⁶⁹⁾。

したがって、運動競技者の身体は、激しい訓練

による極度な苦痛や、勝利を愛求するのに必要な気概や自負、向こう見ずなどに偏ったパトスを運動競技者のプシューケーに生み出し、また他方、その運動競技者のプシューケーは、運動競技の反道徳的な性格によって、勝負の駆け引きに必要な狡猾さや日常の道徳的規範には収まりきらない自由をそなえている。そして、上に述べたように、運動競技者の身体の有効性の美は、それを眺める者のプシューケーに快樂を提供し、運動競技に固有の魅力を生み出しているのである⁷⁰⁾。

おわりに

以上、プラトンの運動競技論を、テクネー、ソーマ、パトスといった三つの視点から考察してきたが、プラトンによると、運動競技は、人間の身体のみによって成立するものではなく、数学や測定術とつながりを持つ極めて知的な営みである。また、運動競技は、強さや速さなどの身体卓越性を使用して対戦相手の身体と競い合うことを意味し、さらに、その使用による有用性の美を通じて、それを眺める人々に快樂を提供する。そして、運動競技には、それに固有の感情や性格として、日常の道徳的規範には収まりきらないような、勝利への愛求や気概、さらには、狡猾さや自由などが見られるのである。

だが、プラトンの場合、運動競技は、人間のプシューケーや身体を、ある特定の環境にしか適応できない偏ったものにしてしまうため、必ずしも肯定的な評価を与えられていない。プラトンにとって、運動競技は、詩や芸術などの伝統的な文化と同じく、反道徳的な性格を持つが故に、国家や教育において危険視されるべきものだったのである。

ただし、逆に言えば、このことは、古代ギリシアの運動競技が、そうした伝統的な文化とならんで、テクネー、ソーマ、パトスのそれぞれにおける高度な専門性を必要とし、また、その高度な専門性によって、多くの人々を惹きつける魅力をそなえていたことを意味する。そして、プラトンは、その魅力を十分に理解した上で、これまで見てき

たような運動競技論を展開しているのである。

とくに、現代においては、スポーツが道徳や教育の観点から論じられることが多いが、プラトンの場合には、対話形式という独特の表現法でもって運動競技のあり方を複眼的に描き出しているのが特徴である。すなわち、プラトンの運動競技論は、現代のわれわれが、そうした道徳や教育の観点のみにとらわれることなく、スポーツの多面的価値を理解し、スポーツ科学やドーピング、フェアプレイなどのスポーツの諸問題に多様な角度から解答を与えていくことを可能にすると言えるだろう⁷⁾。

註および参考文献

- 1) たとえば、佐藤は、文化的所産としてのスポーツを、ルールや作戦やトレーニング法などの知的契機、運動様式などの身体的契機、倫理的、美的価値観などの感性的契機からなる「複合的構成体」として理解している、佐藤臣彦「体育とスポーツの概念区分に関するカテゴリー論的考察」『体育原理研究』第22号、pp. 8-10、1991年。本稿で挙げた、テクネー（技術）、ソーマ（身体）、パトス（感情）という三つの視点もまた、上のような佐藤の言うスポーツ構造の三契機にもとづくものである。
- 2) なお、底本には、Burnet, J. (Ed.), *Platonis Opera* (5 vols), Oxford, 1900-1907を、邦訳には、田中美知太郎・藤澤令夫編『プラトン全集（全15巻、別巻1）』岩波書店、1975-1978年を用いたが、運動競技に関連する用語や細部の表現に関して、若干訳を変更させて頂いた。また、作品名の後にある数字とアルファベットは、ステパヌス版の頁番号を表している（さらに、アリストテレスの場合は、ベッカー版の頁番号を表す）。原典や訳本の引用箇所を特定する際には、この番号を参照されたい。
- 3) アーウィン、技術の基本的性格を、本文に挙げた、対象性、合理性、生産性という三つの特性によって捉えている、Irwin, T. H., *Plato's Moral Theory. The Early and Middle Dialogues*, Clarendon Press, 1977, pp.71-75. そのほか、国内の文献では、瀬口昌久『魂と世界—プラトンの反二元論的世界像』京都大学学術出版会、2002年、pp.264-288および上田徹『プラトン初期対話篇研究』東海大学出版会、2001年、pp.17-19などを参照のこと。
- 4) 『ゴルギアス』457B、『国家』第二巻374B-D。
- 5) 『ソピステス』219B-E、224E-225B。
- 6) 『ソピステス』265B。
- 7) 『ソピステス』219C。
- 8) 『ソピステス』219B。
- 9) 『ソピステス』225A-B。
- 10) 『ソピステス』225A-B。
- 11) 『エウテュプロン』13A。
- 12) 『法律』第七巻824A。
- 13) 『ポリティコス』283B-285C。
- 14) 『ポリティコス』306E。
- 15) 『ポリティコス』307A-B。
- 16) 『ポリティコス』307B-C。
- 17) 普通、古代ギリシア語の「プシューケー」には、「たましい」という訳語が用いられているが、プラトンの言うプシューケーは、精神の高度に意識的な側面から、無意識的な生命現象まで幅広い意味を持つ語である。本稿では、これを加味して、「プシューケー」をそのまま片仮名表記で用いることにした。
- 18) 『ヒippiアス（小）』375A-B。
- 19) 『ヒippiアス（小）』373C-374B。
- 20) 『国家』第二巻371E。
- 21) 『国家』第六巻495D。
- 22) プラトンが医術に関して述べているように、それぞれの専門家（デーミウウルゴス）が報酬を獲得するという利益にあずかるためには、かれらの技術に報酬獲得術（ミストーティケー）が別に伴わなければならない。というのも、かれらは、無償で仕事をする場合にも、他人

- に利益（たとえば健康）をもたらすということがありうるからである（『国家』第一巻346A-E）。
- 23) 『国家』第六巻495D。
- 24) 『ピレボス』55D-56A。
- 25) 『ピレボス』56A。ただし、この『ピレボス』や前章で見た『ポリティコス』では、運動競技者の身体のはたらきに尺度（メトロン）を加え、それに時宜（カイロス）を得させる能力は、単なる経験や錬磨やローマーにはなく、むしろ、計算術や測定術などの方に割り当てられている。つまり、『ゴルギアス』でも指摘されているように、技術が、対象領域の本性（ピュシス）や自らの行為の根拠（アイテアー）について、理論的な説明（ロゴス）を与えることができるのに対して、経験は、それらについて何の理論的な説明を持たず、錬磨や記憶（ムネーメー）とともに、快楽へと向かっていくものだからである（『ゴルギアス』501A）。本文で引用した『ピレボス』の「多くの人々（大衆）」という言い方もまた、当時の通俗的な技術観に対するプラトンのアイロニカルな表現であると言えるだろう。
- 26) 『国家』第三巻410B。
- 27) 『ゴルギアス』515E、『プロタゴラス』342B-C。
- 28) なお「パンクラティオン」とは、ボクシングとレスリングを兼ねた「総合格闘技」のことで、噛み付きと目潰し以外は何でもあり、勝敗は、選手のいずれかが死ぬか、降参するかによって決まる。
- 29) 『法律』第七巻794D-795D。
- 30) 『法律』第七巻796A、814D、第八巻832E-833A。
- 31) 『法律』第七巻796A。
- 32) 『国家』第四巻422B-C。
- 33) 『国家』第三巻404A。
- 34) なお、運動競技者の生活習慣についてのプラトンの記述は、本文のような睡眠に関するものだけではない。たとえば、『国家』の別の箇所では、食事に関して、パンクラティオンの競技者であったプリュダマスが牛肉食を身体の益になるものと見なしていたことや（『国家』第一巻338C-D）、肉食が強さを増強させることが紹介されている（『国家』第五巻468D）。また、一流の運動競技者たちが、運動競技における勝利追求（ピロニーキアー）のため、訓練期間中に性行為を一切行わなかったことは、本文で少しふれた『国家』第三巻だけでなく（『国家』第三巻404B-D）、『法律』第八巻にも見ることができるし（『法律』第八巻839E-840B）、さらに『法律』第二巻からは、身体訓練（ソーマスキアー）のために酒を飲む習慣があったことを窺い知ることができる（『法律』第二巻674B）。そして、この身体訓練のために酒を飲む効果としては、ボクシングやレスリングにおける痛みの軽減や精神の高揚などが考えられるが、この習慣自体は、現代のドーピングに最も近いと言えるのかもしれない。
- 35) 『ティマイオス』87E。
- 36) 『法律』第五巻728D-E。
- 37) ちなみに、アリストテレスは、「運動競技術に適した身体の卓越性（アゴーニスティークー・ソーマトス・アレテー）として、速さと強さのほかに「大きさ（メゲトス）」をあげ、「大きさにおいて優っていることとは、背丈や厚みや幅広さにおいて多くの人々を凌駕しており、その大きさの程度が、人並み外れて大きいことで、この分動きを鈍くしている、というところまでは至っていないことである」（『弁論術』1361b18-21）と述べている。
- 38) 『ティマイオス』90E-92C。
- 39) 田中は、職人の技量や身体的特徴について、本文と同種の見解を述べている。田中美知太郎『善と必然との間に』岩波書店、1952年、pp.207-208、「技術」の章を参照。なお、田中の場合、ローマーを「力」、トリペーを「錬磨」や「練習」「手練」「熟達」「熟練」と

- 訳しており、それらは、本稿の技量（ローマー）や熟練（トリパー）という訳語と、必ずしも正確に対応しているわけではない、前掲書、p.193、p.202参照。
- 40) ただし、動物体の中でも、家畜のからだ人が為的に作りかえられる可能性を持つことは、『エウテュプロン』や『法律』第五巻などでも指摘されている（『エウテュプロン』13B、『法律』第五巻735B-C）。
- 41) たとえば、『国家』第七巻によると、身体の卓越性は、「以前にはなかったのが後になってから、習慣（エトス）と練習（アスケシス）によって内に形成される」（『国家』第七巻518D）と述べられている。
- 42) 『ティマイオス』43C、61C-D。そのほか『ピレボス』でも、「プシューケーと身体が一つパターマ（情態変化）のなかに共同の形でおかれていて、共同的にまた動くとき、この動を別にまた『アイステーシス（感覚—知覚）』という名で呼ぶ」（『ピレボス』34A）と言われている。また、アリストテレスも、『靈魂論』において、プシューケーのもとに生ずる本質的属性としてのパトスが、身体なしには生じないことを明らかにしている（『靈魂論』403a5-18）。
- 43) 『国家』第十巻620B、『法律』第八巻839E-840B。
- 44) 『国家』第八巻548B-549A。
- 45) 『法律』第一巻646C。
- 46) 『法律』第一巻633A-D。
- 47) 『国家』第三巻411C。
- 48) 『法律』第五巻728E。
- 49) 『ソピステス』219C。
- 50) 『国家』第一巻333E。
- 51) 『国家』第一巻333E。
- 52) 『国家』第一巻334A-B。
- 53) 『ソピステス』219C。
- 54) 『国家』第二巻382C-383A。
- 55) 『国家』第三巻389B-C。
- 56) 『法律』第二巻659D-660A。
- 57) 『ヒッピアス（小）』376B。
- 58) 『ヒッピアス（小）』375B。
- 59) 『ヒッピアス（小）』373C-374B。
- 60) 『法律』第十一巻937E-938B、『テアイテトス』172E-173B。
- 61) 『ゴルギアス』456D-E、460C-D。
- 62) 『ゴルギアス』520C-D。
- 63) 『カルミデス』164A-C。医者が関わりうるのは、あくまでも健康であって、かりに健康となった人間が正や不正をはたらくとしても、医者自身にその責任はない。というのも、医者とは、正不正についてではなく、ただ健康や病気について、知っている者だからである。
- 64) 『国家』第一巻333E。
- 65) 『ゴルギアス』474D-E。
- 66) 『ヒッピアス（小）』373C-374B。
- 67) 『ヒッピアス（大）』295C。そのほか、運動競技における身体のはたらき（エルゴン）の美については、『カルミデス』でも述べられている（『カルミデス』159C-D）。
- 68) 『ゴルギアス』474E。
- 69) ただし、本文で見た『ゴルギアス』の指摘からもわかるように、快楽性の美は、有用性の美とけっして重なるものではないから、身体の場合にも、有用性の美のほかに、何か身体を眺める人たちを喜ばせるような快楽性の美を取り上げてみる必要があるだろう。たとえば、『テアイテトス』では、身体の美しさについて何も述べられていないものの、身体の形態には、しなやかで見るに足るものと、こわばって見るに足らないものが存在することが示唆されている（『テアイテトス』162B）。また、上の箇所でも述べられているように、当時のギムナシオン（体育場）やパライストラ（レスリング場）では、運動競技の訓練のほとんどが全裸で行われていたため、それらの訓練によって鍛えられた運動競技者の裸体が見物の対象となっていたことも、たしかである。すなわち、ギムナシオンには、ギムナスティケーや入浴のためだけでなく、

同性愛の相手や芸術のモデルを探しにやってくる者も、少なくはなかったのである。しかしながら、前章の考察によると、運動競技者の身体の形態は、ある特定の部位が大きすぎたり、身体全体の大きさが大きすぎたりしているため、均衡すなわち美しさを欠いていたのであり（『ティマイオス』87E）、運動競技者の身体が、その使用においてではなく、その形態において、何らかの美を提供したとは、少々考えにくい。また、運動競技者の身体と同性愛の対象となった身体は、必ずしも一致するものではないだろう。たとえば、プラトンの記述によると、同性愛の中でも少年が恋愛対象となる場合、それは、おおよそ鬚の生える年頃の少年を対象としているから（『饗宴』181D）、ここで美しいとされる身体が、鍛え抜かれた運動競技者の身体であるとは考えにくいはずである。さらに、ギリシアの彫刻や壺絵に表現された運動競技者の身体は、「平均のものではなく、特殊なものであり、理想に基づいて収集され、描写されたものであるから」〔ブルクハルト、新井靖一訳『ギリシア文化史6』筑摩書房、1998年、p. 13〕、それらの形態美が、現実の運動競技者の身体に直接結びつくとは限らないのである。

- 70) そのほかにも、運動競技を観戦する者が、上のような気概や自負、向こう見ずなどのパトスによって生じた運動競技者の性格を模倣し、運動競技者と似た性格になるということも十分に考えられる。だが、この問題に関しては、詩や演劇の鑑賞についての考察を必要とするので、また紙面をあらためて取り扱うことにする。
- 71) ただし、本文の指摘は、運動競技を道徳や教育の観点から論じる可能性を全面的に否定するものではない。むしろ、プラトンは、運動競技を教材として歴史上最初に教育思想の中に位置づけた人物であり、かれは、運動競技を徳や感情の教育との関わりにおいても論じているからである。だが、これらについては、

今後の課題とすることにしたい。なお、本稿は、独立行政法人日本学術振興会から交付された平成18年度科学研究費補助金、基盤研究(B)「現代社会におけるスポーツの諸問題と多元的価値に関する研究—スポーツ文化・現代身体論への学際的アプローチ」、および、若手研究(B)「身体文化の身体教育学的研究—21世紀の新たな教育文化の創造に向けて—」による研究成果の一部である。